

[花き]

6.9 キク（施設）

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・生物農薬、被覆栽培、マルチ栽培により化学農薬の使用を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		1 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(点滴かん水施肥)及び追肥体系とする。 ○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 ○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○生物農薬利用技術(B T 剤)	オオタバコガ ハスモンヨトウ	3回 3回
	○被覆栽培技術(防虫網)	タバコガ類 ヨトウムシ類	3回 3回
	○マルチ栽培技術	雑草	1回
	○熱利用土壌消毒技術(蒸気消毒)	雑草、土壌伝染性病 害、センチュウ	1回
	○光利用技術(黄色灯) (シルバーマルチ)	夜蛾類 アザミウマ、アブラムシ	3回 2回
その他の留意事項			

70 キク（露地）

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・生物農薬、被覆栽培、マルチ栽培により化学農薬の使用を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		1 t /10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 10%
	○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○生物農薬利用技術（B T 剤）	オオタバコガ ハスモンヨトウ	3回 3回
	○被覆栽培技術（雨よけ）	黒斑病	3回
	○マルチ栽培技術	雑草	1回
	○光利用技術（黄色灯） （シルバーマルチ）	夜蛾類 アザミウマ、アブラムシ	3回 2回
その他の留意事項			

7 1 バラ

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・マルチ栽培により化学農薬の使用を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		1. 5 t/10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(点滴かん水施肥)及び追肥体系とする。 ○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 15%
	○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○マルチ栽培技術	雑草	3回
その他の留意事項			

## 7.2 カーネーション

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・被覆栽培、マルチ栽培、機械除草、黄色灯により化学農薬の使用を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		1 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(点滴かん水施肥)及び追肥体系とする。		窒素成分削減率 20%
	○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 15%
	○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○被覆栽培技術(防虫網)	タバコガ類	1回
	○マルチ栽培技術	雑草	1回
	○抵抗性品種栽培技術	立枯病	1回
	○熱利用土壌消毒技術(蒸気消毒)	立枯病	1回
	○光利用技術	夜蛾類	3回
その他の留意事項			

### 7.3 テッポウユリ

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・マルチ栽培、機械除草により化学農薬の使用を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		2 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(点滴かん水施肥)及び追肥体系とする。 ○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 15%
	○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○マルチ栽培技術	雑草	2回
	○温湯消毒技術	ネダニ	1回
その他の留意事項			

#### 7.4 新テッポウユリ

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・被覆栽培、マルチ栽培、機械除草により化学農薬の使用を低減する。
- ・葉枯れ病の発生が多い品種は雨よけ栽培を行い農薬の低減を行う。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		2 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(点滴かん水施肥)及び追肥体系とする。		窒素成分削減率 15%
	○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 ○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○被覆栽培技術(雨よけ)	葉枯れ病	4回
	○マルチ栽培技術	雑草	2回
その他の留意事項			

7.5 スカシユリ

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・マルチ栽培により化学農薬の使用を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		2 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(点滴かん水施肥)及び追肥体系とする。 ○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 15%
	○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○マルチ栽培技術	雑草	1回
その他の留意事項			

7.6 フリージア

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・マルチ栽培により化学農薬の使用を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		1 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(点滴かん水施肥)及び追肥体系とする。 ○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 15%
	○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○マルチ栽培技術	雑草	1回
その他の留意事項			

7.7 グラジオラス

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・マルチ栽培により化学農薬の使用を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		1 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(点滴かん水施肥)及び追肥体系とする。		窒素成分削減率 15%
	○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 ○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○マルチ栽培技術	雑草	2回
その他の留意事項			

7.8 球根アイリス

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・マルチ栽培により化学農薬の使用を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		1 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(点滴かん水施肥)及び追肥体系とする。		窒素成分削減率 15%
	○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 20%
	○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 15%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○マルチ栽培技術	雑草	1回
その他の留意事項			

7.9 ダリア

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・被覆栽培、マルチ栽培により化学農薬の使用を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		1 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(点滴かん水施肥)及び追肥体系とする。 ○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 20%
	○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 15%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○被覆栽培技術（雨よけ）	花枯病 灰色かび病	1回 1回
	○マルチ栽培技術	雑草	1回
その他の留意事項			

80 スイセン

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・マルチ栽培により化学農薬の使用を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		2 t /10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 ○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○マルチ栽培技術	雑草	1回
その他の留意事項			

### 8.1 チューリップ

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・マルチ栽培により化学農薬の使用を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		1 t /10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 15%
	○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○マルチ栽培技術	雑草	2回
その他の留意事項			

## 8.2 ストック

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・生物農薬、被覆栽培、マルチ栽培により化学農薬の使用を低減する。
- ・コナガの防除のためB T剤の使用、防虫ネットの被覆により化学農薬の使用を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		1 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(点滴かん水施肥)及び追肥体系とする。 ○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 ○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 15%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病害虫等	農薬散布削減回数
	○生物農薬利用技術(B T剤)	コナガ	5回
	○被覆栽培技術(防虫網)	コナガ	5回
	○マルチ栽培技術	雑草	1回
	○光利用技術 (シルバーマルチ)	アザミウマ、アブラムシ	2回
その他の留意事項			

8.3 トルコギキョウ

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・被覆栽培により化学農薬の使用を低減する。
- ・ヨトウムシ類の防除のため施設の開口部を防虫ネットで被覆したり、黄色灯の利用により化学農薬の使用を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		1 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(点滴かん水施肥)及び追肥体系とする。		窒素成分削減率 15%
	○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 20%
	○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 15%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○被覆栽培技術(防虫網)	ヨトウムシ類	5回
	○熱利用土壌消毒技術(蒸気消毒)	雑草、土壌伝染性病 害、センチュウ	1回
	○光利用技術(黄色灯) (シルバーマルチ)	夜蛾類 アザミウマ、アブラムシ	3回 2回
その他の留意事項			

8.4 スターチス・シヌアータ

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・マルチ栽培、機械除草により化学農薬の使用を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		1 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(点滴かん水施肥)及び追肥体系とする。		窒素成分削減率 20%
	○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 ○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 15%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○マルチ栽培技術	雑草	1回
	○光利用技術（黄色灯） （シルバーマルチ）	夜蛾類 アザミウマ、アブラムシ	2回 2回
その他の留意事項			

### 8.5 宿根スターチス

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・被覆栽培、マルチ栽培により化学農薬の使用を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		1 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(点滴かん水施肥)及び追肥体系とする。 ○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 ○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 15%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○被覆栽培技術(防虫網)	ヨトウムシ類	3回
	○マルチ栽培技術	雑草	1回
	○光利用技術(黄色灯) (シルバーマルチ)	夜蛾類 アザミウマ、アブラムシ	2回 2回
その他の留意事項			

8.6 宿根カスミソウ

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・被覆栽培により化学農薬の使用を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		1 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(点滴かん水施肥)及び追肥体系とする。		窒素成分削減率 20%
	○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 ○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 15%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○被覆栽培技術(防虫網)	ヨトウムシ類	5回
	○光利用技術(黄色灯) (シルバーマルチ)	夜蛾類 アザミウマ、アブラムシ	2回 2回
その他の留意事項			

8.7 ブバルディア

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・マルチ栽培により化学農薬の使用を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		1 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(点滴かん水施肥)及び追肥体系とする。		窒素成分削減率 15%
	○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 ○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○マルチ栽培技術	雑草	1回
	○光利用技術（黄色灯） （シルバーマルチ）	夜蛾類 アザミウマ、アブラムシ	2回 2回
その他の留意事項			

88 ガーベラ

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・被覆栽培、マルチ栽培により化学農薬の使用を低減する。
- ・マメハモグリバエの防除のため防虫ネットを開口部に被覆し、化学農薬の使用を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		1 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(点滴かん水施肥)及び追肥体系とする。 ○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 ○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○被覆栽培技術(防虫網)	マメハモグリバエ	5回
	○マルチ栽培技術	雑草	1回
	○光利用技術(黄色灯) (シルバーマルチ)	夜蛾類 アザミウマ、アブラムシ	2回 2回
その他の留意事項			

89 リンドウ

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・被覆栽培、マルチ栽培により化学農薬の使用を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		1 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(点滴かん水施肥)及び追肥体系とする。 ○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 ○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○被覆栽培技術(雨よけ)	葉枯れ病	2回
	○マルチ栽培技術	雑草	2回
	○光利用技術(黄色灯) (シルバーマルチ)	夜蛾類 アザミウマ、アブラムシ	2回 2回
その他の留意事項			

90 ミヤコワスレ

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・マルチ栽培により化学農薬の使用を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		1 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(点滴かん水施肥)及び追肥体系とする。 ○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 15%
	○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○マルチ栽培技術	雑草	1回
	○光利用技術（黄色灯） （シルバーマルチ）	夜蛾類 アザミウマ、アブラムシ	2回 2回
その他の留意事項			

9 1 マーガレット

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・被覆栽培、マルチ栽培により化学農薬の使用を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		1 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(点滴かん水施肥)及び追肥体系とする。 ○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 ○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 15%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○被覆栽培技術（雨よけ）	青枯病	1回
	○マルチ栽培技術	雑草	1回
	○光利用技術（黄色灯） （シルバーマルチ）	夜蛾類 アザミウマ、アブラムシ	2回 2回
その他の留意事項			

## 9 2 宿根アスター

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・被覆栽培、マルチ栽培により化学農薬の使用を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		1 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(点滴かん水施肥)及び追肥体系とする。 ○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 ○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 15%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○被覆栽培技術(防虫網)	ヨトウムシ類 ハモグリバエ類	3回 2回
	○マルチ栽培技術	雑草	1回
	○光利用技術(黄色灯) (シルバーマルチ)	夜蛾類 アザミウマ、アブラムシ	2回 2回
その他の留意事項			

9.3 センリョウ

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・マルチ栽培により化学農薬の使用を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		1 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(点滴かん水施肥)及び追肥体系とする。 ○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 ○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○マルチ栽培技術	雑草	2回
その他の留意事項			

#### 9.4 ツツジ・サツキ

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・生物農薬、被覆栽培、マルチ栽培により化学農薬の使用を低減する。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		1 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(点滴かん水施肥)及び追肥体系とする。 ○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 ○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○生物農薬利用技術(B T 剤)	ハニモンアオリガ	1 回
	○被覆栽培技術(雨よけ)	褐斑病	2 回
	○マルチ栽培技術	雑草	2 回
その他の留意事項			

9 5 ツバキ・サザンカ

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・被覆栽培、マルチ栽培により化学農薬の使用を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		1 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(点滴かん水施肥)及び追肥体系とする。 ○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 ○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○被覆栽培技術(雨よけ)	炭そ病	2回
	○マルチ栽培技術	雑草	2回
その他の留意事項			

9 6 カイツカイブキ

- ・地域の土壌条件に応じて、たい肥等による土づくりを行う。
- ・地域の土壌条件に応じて、局所施肥、肥効調節型肥料、有機質肥料を利用して化学肥料の使用を低減する。
- ・マルチ栽培、機械除草により化学農薬の使用を低減する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
たい肥等施用技術	○土壌診断に基づいた牛ふんたい肥、バークたい肥等の施用を基本とする。		2 t /10a
化学肥料低減技術	○局所施肥(点滴かん水施肥)及び追肥体系とする。 ○肥効調節型肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。 ○有機質肥料を基肥もしくは追肥または両方で施用する。		窒素成分削減率 20%
化学農薬低減技術	導入する個別技術	対象病虫害等	農薬散布削減回数
	○マルチ栽培技術	雑草	2回
その他の留意事項			